

# 「飼料用米の栽培管理のポイント」

## 1 はじめに

県では、米価の安定化や農業者の方々の所得確保を図るため、飼料用米等の非主食用米の生産による水田フル活用を推進しています。

そこで、今回は収入面で有利な多収性品種「新潟次郎」と「いただき」の栽培管理のポイントを平成27年度の多収穫米実証ほの成績とあわせてご紹介します。

## 2 平成27年の実証ほ成績

### (1) 新潟次郎

- ・実証ほ8地点の平均収量（実収）は711kg/10aで、6地点が基準単収プラス150kg以上を確保しました。

### (2) いただき

- ・実証ほ5地点の平均収量（実収）は650kg/10aで、4地点が基準単収プラス150kg以上を確保しました（新発田は、台風15号等の影響で減収）。

表1 「新潟次郎」の収量・収量構成要素他

	移植日 (月/日)	収量構成要素					実収 (kg/10a)	穂もち 発生程度
		穂数	1穂粒数	m <sup>2</sup> 粒数	登熟歩合	千粒重		
		(本/m <sup>2</sup> )	(粒)	(粒/m <sup>2</sup> )	(%)	(g)		
村上	5/11	460	87	40,020	75	21.2	630	無
巻	5/3	425	93	39,525	63	23.1	820	希
三条	5/5	463	97	44,911	54	23.7	794	無
長岡	5/1	451	84	37,900	71	22.1	702	無
南魚沼	5/16	391	108	42,130	59	21.3	643	少
柏崎	5/8	560	102	56,900	87	20.1	772	無
糸魚川	5/9	507	81	41,067	81	20.9	650	希
佐渡	5/7	428	70	30,003	77	23.4	680	無
平均		461	90	41,557	71	22	711	無～少
指標値		410～450	90～96	39,000～41,000	80	21.5～22.5	700	

表2 「いただき」の収量・収量構成要素他

	移植日 (月/日)	収量構成要素					実収 (kg/10a)	穂もち 発生程度
		穂数	1穂粒数	m <sup>2</sup> 粒数	登熟歩合	千粒重		
		(本/m <sup>2</sup> )	(粒)	(粒/m <sup>2</sup> )	(%)	(g)		
新発田	5/14	303	80	24,275	65	23.5	446	無
魚沼	5/27	352	95	33,440	78	25.8	784	無
十日町	5/28	363	80	28,000	90	24.6	680	無
上越(V溝直は)	5/9	464	84	38,976	74	25.0	725	無
糸魚川	5/9	402	92	37,000	78	24.2	614	希
平均	7/29	377	86	32,338	77	24.6	650	無～希
指標値		340～370	94～102	35,000～37,000	80～85	23.3～24.0	700	

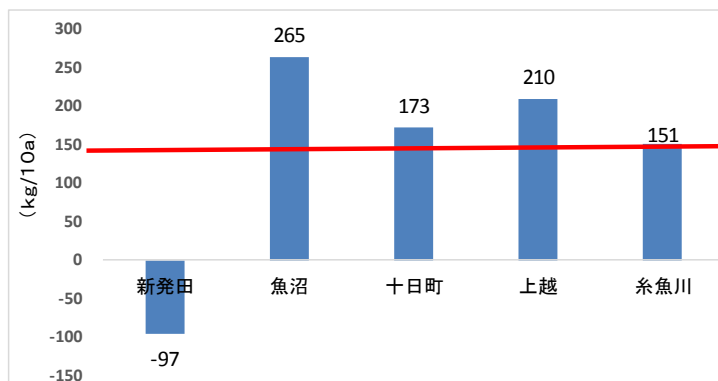
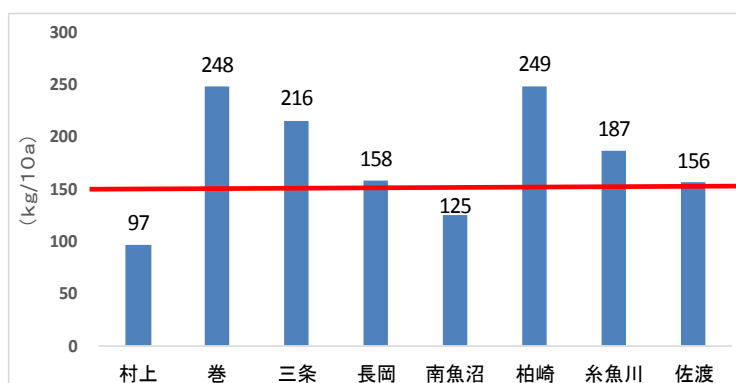


図1 収量と市町村基準単収との差(新潟次郎)

図2 収量と市町村基準単収との差(いただき)

### 3 栽培管理のポイント

#### (1) 土づくり

○多収穫栽培では土壌養分を収奪しやすいので、堆肥や土づくり資材等を積極的に施用しましょう。

・連作すると、特に高地力ほ場で窒素・ケイ酸が減少傾向となります。

○多収量を得るには収数の確保が重要です。根の健全な発達を促すために耕深 15cm を確実に確保しましょう。

#### (2) 適正な生育量の確保

○適正な基肥量を施用しましょう

○穂肥は過不足がないように適量を施用しましょう。

・2回に分けてめやすの窒素分量を確実に施用しましょう。

・特に、収数確保のため、1回目の穂肥は遅れずに施用しましょう。

・葉色を維持するため、追加の穂肥・実肥を必要に応じて施用しましょう。

表3 基肥のめやす

品種	基肥窒素施用量 (kg/10a)
新潟次郎	7.0
いただき	6.0~7.0

表4 穂肥のめやす

品種	穂肥1回目(窒素)		穂肥2回目(窒素)	
	施用時期 (出穂前日数)	施用量 (kg/10a)	施用時期 (出穂前日数)	施用量 (kg/10a)
新潟次郎	25~23日	3.0	14日	3.0
いただき	25~23日	3.0	14日	3.0

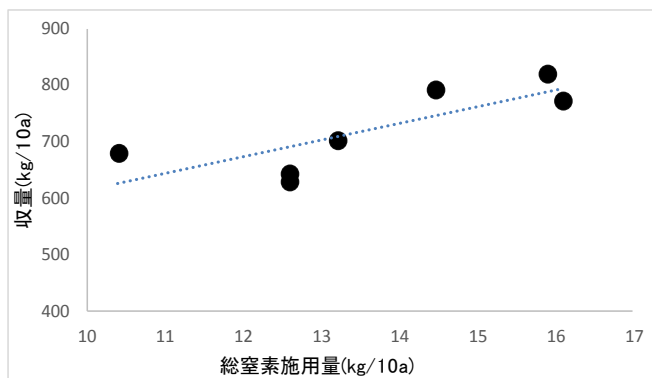


図3 総窒素施用量と収量の関係(新潟次郎)

◎総窒素施用量が多いほど収量が増加する傾向

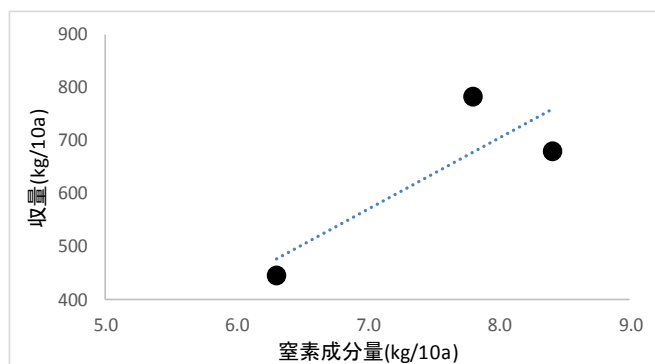


図4 穂肥窒素施用量と収量の関係(いただき)

◎穂肥窒素施用量が多いほど収量が増加する傾向

#### (3) 適期の田植え及び適正な栽植密度の確保

○新潟次郎は5月上旬、いただきは5月中旬をめやすに田植えしましょう。

・特に晩生品種は、遅く植えると出穂が遅くなり登熟不良となり収量が低下する心配があります。

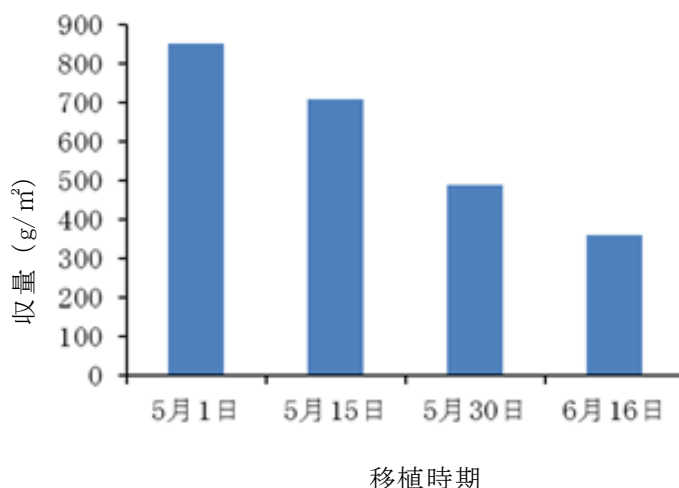


図5 晩生品種の移植時期と収量の関係(松村ら2008改変)

- 適正な栽植密度で田植えしましょう。
- 「新潟次郎」は㎡当たり18株（60株セット）以上、「いただき」は㎡当たり15～18株（50～60株セット）とし1株苗数は3～4本をめやすとしましょう。

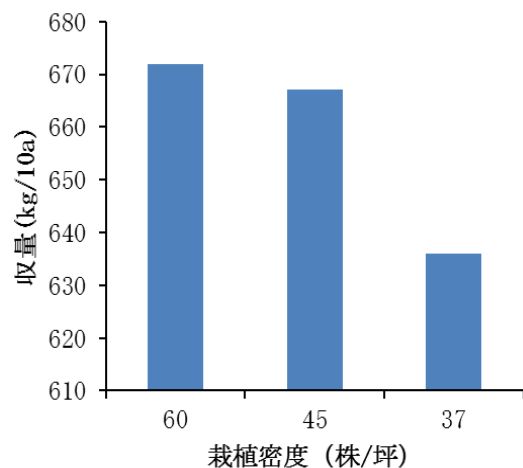


図6 栽植密度と収量の関係

(作研、新潟次郎、H22・23年平均)

#### (4) 防除の徹底

- 多収穫栽培は窒素施肥量が多く、いもち病が多発生しやすいので、葉いもち防除は必ず育苗箱施用により行い、穂いもち防除は、予防防除を行きましょう。

## 4 おわりに

以上、ご紹介しました栽培管理のポイントを農業者の皆様が実践され、目標収量を確保して最大の収入をあげて頂くことを期待しております。

【経営普及課 農業革新支援担当（作物） 石山 誠一】